

トラック 12-1

昔、子供の無い夫婦がいた。そこで夫は願掛けをした「もし私が生きている間に子供を持てたら、その子がンガジジャ（島々のこと、また大陸も指す）に行けるように旅をさせてやる」。夫婦は一緒に暮らし、ムーサという子供をもうけた。ムーサは思春期になるまで、同じ年頃の子供たちと話をしようとする度に言われた：「黙れよ、空約束されたお前なんか」。こうして彼は心に悩みを抱えていた。

或る日、彼は父と母を呼び、剣を手にとって言った：「もし、僕についてどんな願掛けをしたのかを話してくれなければ、それに、それを守らないのなら、あなた方の首を刎ねてから僕も死にます」。父親は答えた：「私は、子供ができなかったので、もし子供が出来たら島に行けるよう旅をさせるという願掛けをした。今日は水曜日だから金曜にお前を旅に出そう」。

一家は木曜に旅の用意をして菓子や茶を揃え、金曜の朝に父親が駱駝と剣を持って来た。子供は駱駝に乗り、荷物を積み込んだ。彼は、食べながら旅を始め、グラウンド・コモロのようなところからマダガスカルに向かって出発した。道の途中で食べ物がなくなってしまった。彼はとてもお腹がすいた。彼は道を進み、死んだ馬を見つけたが、腹が動いていた。彼は駱駝から降り、神の恵みを乞うてから腹を割くと、生きた仔馬を見つけた。彼はそれを取り出して焼いてから食べ、駱駝にも食べさせた。彼は右のわき腹の汗を集めて飲み、それを馬〔駱駝の言い間違い〕にも飲ませた。再び出発する前に彼は自問した：「ムーサよ、お前はどこに行くんだ、何を言おうとしているんだ」。彼は言った「僕は許されたものを食べた、許されていないものから出てきたものを。僕は水を飲んだ、大地からも空からも来なかった水を」。彼は駱駝に乗り出発した。

彼はとある村に着いた。村の入り口で彼は、ひとりの老婆が何をするでもなく、そこに佇んでいるのを見た。彼は老婆に言った：「おばあさん、助けて下さい。私に水を下さい」。老婆は答えた：「わが子よ、男前で駱駝に乗っているあんたが、おばあさんから瓢箪の水を飲もうなんて言うのかい」。彼は答えた：「渴いている者は水を選びません」。そこで老婆はムーサに水を与え、彼はそれを飲んで神に感謝した。彼が駱駝を呼んだ時、老婆は「どこから来たんだい」と尋ねた。ムーサは答

えた：「ンガジジャ [グランド・コモロ島] から来て、マダガスカルに向かうところですよ」。

「ここで私と一緒に住んでみないかい」。

「それは難しくはないでしょう、おばあさん。理解し合うことが出来れば難しいことじゃありません。私の旅の目的は人間を知ることですし、人々にも私を知って欲しいのです」。

「それじゃ、ここで一緒に住むことにするが、あんたに、この村でやってはいけないこと [fadi : マダガスカル語] を教えておこう。この村にはスルタンがいる。彼は毎週金曜になるとよそ者の首を刎ねるんだ。スルタンは謎掛けをして、そのよそ者が答えられなければ、首を刎ねるというわけさ」。

「そうしなくてはいけないのなら、金曜の礼拝に行かずにじっとできますよ」。

ところが、ムーサはあらゆる知識に通じていた。

ムーサは木曜まで過ごしたが、老婆に言った：「おばあさん、神への義務を果たすのに金曜の礼拝に行かないというのはとても耐えられません。それは非常に苦しいことです。明日まで生きていたら、私は金曜の礼拝に行きます」。

「わが子よ、お前は神が私に遣わしたたった一人の孫なんだよ。お前が金曜の礼拝に行ったら、スルタンがお前の首を刎ねてしまうし、そうなったら私は一人きりになってしまうんだよ」。

「おばあさん、私は神を信頼していますので明日金曜の礼拝に行きます」。

翌日の朝、老婆はご馳走を作って孫に与え、彼はそれを食べた。そして礼拝の間になるとムーサは出かけたが、偶然にもスルタンの隣に座った。礼拝が終わり、人々が出ようとしたところでスルタンが話し始めた：「待ちなさい。よそ者がひとりいるので近づきになろうと思う」。スルタンはムーサに挨拶をし、彼らは知り合いとなった。そしてスルタンは言った：「お前たちに謎掛けを出そう。もしそれを解いたら生き延びるが、解けなかったら、まずお前、よそ者のお前の首を刎ねる」。ムーサは答えた：「どうぞ」

「では、【神はどこにおられ、またどこにおられないか】、答えてみよ」。

参列者は呆然として5分の間答えることが出来なかったが、ムーサが手を挙げた。

「殿下、その謎掛けはすべての参列者へのものなのでしょうか、或いは私だけへのものなのでしょうか？」。

彼はもう一度手を挙げて尋ねた：「そして、あなた方、おじいさんさん、父さん、おじさん方、私がスルタンに答えることに同意されますか？」。彼らは答えた：「勿論、同意する」。

ムーサはランプを持ってきて火を点すよう頼み、ランプに火が点された。そして彼は尋ねた：「閣下、ここにあるランプは、どこを向いていて、どこを向いていませんか？」。

スルタンは答えた：「それは四方八方を向いている」。

「そのことは神についても同じです。神がおられたりおられない場所というものはありません。神はどの場所にもおられ、あらゆる方向を向いておられるのです」。

ムーサは喝采を浴びた。

スルタンは言い返した：「謎掛けはそれだけではなく、他にもあるのだ。【我々が礼拝をしたこのモスクは水平であるのか、そうでないのか】、答えてみよ」。

ムーサは答えた：「水平です」。

スルタンは尋ねた：「どうして水平だと言えるのか？」。

ムーサは椀を持って来て、それに水を注ぐよう頼んだ。

「閣下、この椀の中で水はどちらに傾き、またどちらに傾いていないでしょうか」。スルタンは答えた：「水が傾いているところや傾いていないところなどない。水は水平に留まっている」。

「それはこの椀についても同様です。この椀は水平であり、それが置かれているモスクも同じです」。

ムーサはスルタンに答えたので喝采を浴びた。参列者が立って出ようとした時、ムーサは手を挙げて頼んだ：「私の方からスルタンに謎掛けをさせて下さい。もしスルタンが答えたら、私の首を刎ねてもいいです」。

スルタンが応じた：「それでは謎掛けを聞こう」。

「私の謎掛けは．．． こういうものです」。

スルタンは回りの人々を見たが、謎掛けの意味がわからず、ムーサに言った：「次の金曜に答えるから時間をくれ」。

ムーサはスルタンを質した：「あんたが首を刎ねた人たちにあんたは時間をやったのか、それともやらなかったのか？」。

スルタンは答えた：「誰もそういうことを頼まなかったのだから、断ることもなかった」。

「それでは、答えるために来週の金曜まで考える時間を与えてあげよう」。

参列者たちは解散した。スルタンも出て、金曜から水曜まで考えたがムーサの謎掛けの答えは見つからなかった。木曜の朝が来て、スルタンは兵隊たちに命じて、木曜の 15 時間の間、村を通行禁止にする旨告げさせた。スルタンは選りすぐりの駱駝を集めて屠らせ、焼かせ、またあらゆる種類の食べ物が準備された。

スルタンはイシャタという自分の娘のひとりを呼びだした。彼女は【スルタンの娘イシャタ】と彫られた指輪を嵌めていた。スルタンは彼女を着飾らせ、金の装身具を付けさせ、ムーサへの人身御供にさせた。それはすべて、ムーサの謎掛けの意味を知るために、娘をムーサの好きにさせ、金曜に彼の喉を掻き切ることを目論んでいたことだった。

日が暮れて、スルタンの娘がムーサの家に姿を見せた時、ムーサはこのような美しい娘が自分の家に来たことに驚いて尋ねた：「君は何をしたいんだ？」。

娘は答えた：「私がここに来たのは、あなたを夫とするためです。私はあなたのことを聞いてとても関心を持ちました。というのも、この村のスルタンはとてもひどい人で、この村に来たよそ者は誰でも喉を描き切ると決めています。そこへひとりのよそ者がやって来て、スルタンに謎掛けをしてスルタンは解けませんでした。それで私たちは喜んでいるのです。このよそ者はスルタンに勝って首を刎ねるだろうと。そのよそ者とは、ムーサあなたなのです」。ムーサは答えた：「それは勿論出来るだろう」。

彼らは朝の 9 時まで一緒に夜を過ごし、娘は起きて出て行ったが、【スルタンの娘イシャタ】と彫られた指輪を忘れていった。ムーサは床を整えていた時にその指輪を見つけてポケットに入れた。スルタンの娘は家に戻り、謎掛けの意味をスルタンに伝えた：「《僕は許されたものを食べた、許されていないものから出てきたものを。僕は水を飲んだ、大地からも空からも来なかった水を》の意味はこういうことです：彼の両親には子供が出来ず、もし子供を授かったら、その子が島々に行けるように旅をさせるという願掛けをしました。両親は旅の準備をしてやり、彼は駱駝と食べ物と一緒に出発しました。道中で彼は食糧が尽き、腹が動いている死んだ馬を見つけました。彼は腹を割いて死んでいない仔馬を見つけ、それを焼いて食べ、

駱駝にも食べさせました。彼は左のわき腹から汗を集めてそれを飲み、駱駝にも飲ませました。これが謎掛けの意味です」。スルタンはそれを書きとめた。

モスクに行く時が来て、村中の人々がモスクに行き、礼拝の後立ち上がろうとしたところでスルタンが言った：「ムーサの首を刎ねるまで待ちなさい。私は彼の謎掛けの意味がわかった。《僕は許されたものを食べた、許されていないものから出てきたものを。僕は水を飲んだ、大地からも空からも来なかった水を》の意味はこういうことなのだ：彼の両親には子供が出来ず、もし子供を授かったら、その子が島々に行けるように旅をさせるという願掛けをした。両親は旅の準備をしてやり、彼は駱駝と食べ物と一緒に出発した。道中で彼は食糧が尽き、腹が動いている死んだ馬を見つけた。彼は腹を割いて死んでいない仔馬を見つけ、それを焼いて食べ、駱駝にも食べさせた。彼は左のわき腹から汗を集めてそれを飲み、駱駝にも飲ませた。これが謎掛けの意味だ。ムーサをここに連れて来い。喉を掻き切ってやる」。

人々はムーサを捕らえて頭巾を被せた。ムーサは手を挙げて言った：「閣下、しばしの猶予を下さい。私のところでは死ぬ前に神の名前を唱えます〔辞世の言葉を語ります〕」。スルタンはそれを許した。

「私の辞世の言葉はこういうものです。《僕は罌を仕掛け、鳥を捕まえた。鳥は翼無しに飛び去った》」。スルタンは驚いて言った：「何だと？」。ムーサはもう一度言った：「《僕は罌を仕掛け、鳥を捕まえた。鳥は翼無しに飛び去った》」。スルタンは尋ねた：「それはどういう意味なのだ」。

ムーサは指輪をポケットから出して参列者に見せた。皆はそれがスルタンの娘の指輪であることを知っていた。彼は言った：「あんたは娘を私の家まで来させて一緒に寝させ、謎掛けの意味を探ろうとした。これがその証拠だ」。

人々はスルタンから位を剥奪してムーサをスルタンとし、彼はスルタンの娘と結婚した。ムーサは現在でもこの地方のスルタンだ。彼は今、親族を連れて来て一緒にここで暮らすために彼らのところに行っている。